

【基礎編】第3回 アセスメント①:フリーオペラント観察

◆ 研修資料(受講者配布用) ◆

1. はじめに:支援は「正しいアセスメント」から始まる

「アセスメント」とは、支援を始める前に、子どものことを正しく知るための「評価」や「情報収集」のことです。適切なアセスメントがなければ、支援はただの「勘」や「思い込み」になってしまいます。

特に、前回学んだ「強化」を効果的に行うためには、その子のやる気の源である「強化子」が何かを正確に把握する必要があります。

- なぜ、ただ聞くだけではダメなのか？
 - 言葉でうまく表現できない子もいる。
 - 「好きなものは？」と聞かれると、いつも同じもの(アンパンマン、電車など)を答えてしまうことがある(本当は他にも好きなものがあるかもしれない)。
 - その時の気分で答えるため、一貫性がないことがある。

そこで、プロの支援者である私たちは、子どもの「行動」から直接、本心(好み)を読み解くための観察技術を使います。それが「フリーオペラント観察」です。

2. フリーオペラント観察とは？

- 定義:子どもが自由に(フリーに)、誰からの指示も制限もなく、環境の中にある様々な物や活動に働きかける(オペラント)様子を、体系的に観察・記録するアセスメント方法です。
- 目的:大人の思い込みを排除し、子どもが自発的に何に興味を示し、どれくらいの時間それに関わるかをデータとして収集することで、効果的な強化子のリスト(メニュー)を作成すること。

簡単に言えば、「子どもの自由な遊び姿の中に、宝物(強化子)を見つけるための、科学的な観察」です。

3. フリーオペラント観察の進め方

Step 1:環境の準備

- 子どもが興味を示しそうな、様々な種類のおもちゃや活動を、子どもが自由に手に取れるように配置します。(例:ブロック、ミニカー、パズル、絵本、お絵描きセット、音の出るおもちゃなど)
- この時、支援者は指示や声かけを一切しません。環境だけを整え、子どもの自発的な行動を待ちます。

Step 2:観察と記録

- 子どもが部屋に入ってから、「何(どのおもちゃ)に」「どれくらいの時間」関わったかを、ストップウォッチなどを使って計測し、記録用紙に記入します。
- 関わり方(ポジティブな発声、表情など)もメモしておくと、より質の高い情報になります。

- 観察時間は、5分～10分程度を目安に行います。

【記録用紙の例】

フリーオペラント観察 記録用紙

- 観察対象児：〇〇くん
- 日付：2025年 〇月 〇日
- 観察時間：10分間

時間(秒)	対象(おもちゃ・活動)	関わりの様子(メモ)
0 ～ 45秒	ミニカー(赤)	手に取って走らせる。ブーブーと声を出す。笑顔。
46 ～ 70秒	ブロック(青)	積み上げようとするが、すぐにやめる。
71 ～ 200秒	ミニカー(赤)	再び手に取る。床だけでなく壁にも走らせて楽しんでいる。
201 ～ 250秒	絵本(電車の図鑑)	ページをめくる。指差しをする。
251 ～ 380秒	ミニカー(赤)	3回目。他のミニカーも並べ始める。
381 ～ 450秒	窓の外を眺める	救急車の音が聞こえ、そちらに関心が移る。
451 ～ 600秒	ミニカー(赤と黄)	救急車が去った後、再びミニカーで遊び始める。

Step 3: データの解釈と活用

- 観察記録を集計し、関わった時間の合計が長いものほど、その子にとって強力な強化子である可能性が高いと仮説を立てます。
- 上記の例では、10分間(600秒)のうち、合計で**300秒**以上も「ミニカー」で遊んでいます。これ

は、〇〇くんにとってミニカーが非常に強力な強化子であることを示唆しています。次いで「電車の絵本」も候補になりそうです。

- この結果を基に、「強化子メニュー」を作成し、支援の中で「課題を頑張ったら、ミニカーで遊ぼう！」といった形で活用します。
- 一度だけでなく、日や時間を変えて複数回行うことで、より信頼性の高いデータが得られます。

4. 観察のポイントと注意点

- 支援者は「空気」になる：観察中は、子どもの視界に入らないようにしたり、話しかけたり、視線を合わせたりしないようにします。大人の存在が、子どもの自然な行動を妨げてしまう可能性があるからです。
 - 「関わっている」の定義を明確にする：ただ触っているだけか、それを使って遊んでいるのか。事前に「〇秒以上、対象に視線を向け、手で操作している状態」など、記録のルールを決めておくと、誰が観察しても同じ精度のデータが取れます。
 - 安全への配慮は怠らない：観察中も、子どもの安全からは決して目を離さないでください。危険な行動があれば、もちろん介入します。
-

◆ 講師用原稿 ◆

(スライド1:タイトル)

「皆さん、こんにちは。研修第3回を始めます。今回は、子どもの望ましい行動を増やす『強化』について学び、そのガソリンとなる『強化子』の重要性を確認しました。

では、その一番重要な強化子を、私たちはどうやって見つければいいのでしょうか？今日のテーマは、その答えとなるプロの観察技術、『フリーオペラント観察』です。」

(スライド2:はじめに) 15分

「支援の専門性は、適切な『アセスメント』、つまり、子どもを正しく知ることから始まります。特に強化子を見つける上で、『〇〇くん、何が好き？』と聞くだけでは、十分な情報を得られないことが多くあります。言葉でうまく言えなかったり、いつも同じ答えが返ってきたり...

そこで私たちが使うのが、子どもの『言葉』ではなく『行動』そのものから、心の声を聞き取る技術です。それが、フリーオペラント観察。子どもの自由な姿から、その子の『大好き！』を科学的に見つけ出す方法を、今日は皆さんにマスターしてもらいます。」

(スライド3:フリーオペラント観察とは?) 20分

「フリーオペラント観察とは、スライドにある通り、私たちが何も指示せず、子どもが自由に遊ぶ様子をじっと観察し、記録する方法です。

ポイントは『フリー(自由)』と『オペラント(働きかけ)』。子どもの自発的な行動こそが、最も正直な『好き』のサインだと考えるわけです。」

「これは、例えるなら『人気のおもちゃランキング調査』です。お店にたくさんのおもちゃを並べて、子どもたちがどのコーナーに一番長く滞在するかを調べるようなものです。長く滞在するコーナーのおもちゃは、人気が高い、つまり、その子にとって魅力的な強化子である可能性が高い、ということになります。

大人の『これが好きだろう』という思い込みを一旦横に置いて、子どもの行動という客観的なデータに耳を傾ける。これが、科学的支援の第一歩です。」

(スライド4:観察の進め方と記録用紙) 40分

「では、具体的な進め方を見ていきましょう。ステップは3つ。準備、観察、そして活用です。」

「ステップ1は環境準備。ここでのポイントは、魅力的なおもちゃを複数、子どもが自由に選べるように配置することです。おもちゃ箱に全部入っている状態では、上にあるものしか手に取らないかもしれません。床や棚に、バランスよく配置してあげましょう。」

「ステップ2が観察と記録。ここで使うのが、この記録用紙です。ストップウォッチ片手に、子どもがあるおもちゃを手にとったら計測開始、手放したらストップ。その時間を記録します。

(記録用紙の例を見せながら)この〇〇くんの例を見てください。彼は10分の間に、何度もミニカーに戻ってきていますよね。そして、合計時間も圧倒的に長い。このようにデータを取ることで、『〇〇くんはミニカーが好きなんだろうな』という私たちの感覚が、『10分中5分以上も遊ぶほど、強い好みである』という客観的な事実に変わります。この差は非常に大きいんです。」

「ステップ3が活用。このデータから、『〇〇くんにとっての一番の強化子はミニカーだ』という仮説が立てられます。ですから、何か新しい課題に挑戦してもらう時、『これができたら、あのミニカーで遊べ

るよ！』という声かけは、彼にとって非常にモチベーションが上がる言葉になる可能性が高い、と言えます。」

(スライド5:グループワーク) 25分

「では、実際に皆さんにデータの解釈を体験してもらいましょう！」

「(ワーク)ここに、B子さん(5歳)の10分間のフリーオペラント観察のデータがあります。(架空のデータをスライドや配布物で提示する)

- データ例:
 - お絵描き: 合計 280秒(キラキラペンを使用。集中して描いている)
 - めいぐるみ: 合計 150秒(抱きしめたり、話しかけたりしている)
 - パズル: 合計 50秒(少しやって、すぐにやめた)
 - 絵本: 合計 120秒(ゆっくり眺めている)

このデータから、B子さんにとって最も強力な強化子、2番目に強力な強化子は何だと考えられますか？そして、その強化子を、どんな支援場面で活用できそうか、グループで話し合ってみてください。(10分程度)」

「(発表後)...素晴らしい分析ですね！どのグループも、一番はお絵描き、二番はめいぐるみ、という結論のようですね。そう、関わっている時間の長さが、好みの強さの指標になります。活用のアイデアも良いですね。『苦手な着替えを頑張った後に、キラキラペンでお絵描きをする』『静かに座っていてほしい時に、お膝にめいぐるみを乗せてあげる』など、具体的な支援の引き出しが、このデータから生まれてきます。」

(スライド6:まとめ) 10分

「本日は、アセスメントの基本として、フリーオペラント観察を学びました。

この観察技術の素晴らしい点は、言葉でのコミュニケーションが難しい子どもの心の中を、行動を通して理解できることです。そして、私たちの支援が『勘』から『科学的根拠』に基づくものへと変わります。」

「明日から、ぜひ数分間でもいいので、支援の合間に『空気』になって子どもを観察し、『今、何に夢中になっているかな？』と記録してみてください。きっと、今まで気づかなかった子どもの『大好き！』を発見できるはずです。」

「次回は、行動を教えるための具体的な技術、『プロンプト(手助け)』について学びます。子どもに『できた！』を経験させてあげるための、とても大切なスキルです。

何か質問はありますか？(質疑応答)

...それでは、本日の研修はこれで終了です。お疲れ様でした。」